

こどもの居場所に関する関係機関協議会（第 1 回フリースクール部会）について

1 開催日時・場所

令和 7 年 6 月 25 日（水）14 時 15 分～16 時 00 分
 鹿児島県おおすみ地域共生みんなの家ふらっと

2 会次第

- (1) 開会
- (2) 部会長選出
- (3) グラウンドルール確認
- (4) 議題等
 - ① 自己紹介、グラウンドルールの説明
 - ② 子ども・保護者との意見交換
 - ③ 施設代表者との意見交換
 - ・ 一般社団法人パーソナルサービス支援機構
代表理事 大倉 一真 氏
- (5) 今後の進め方、委員の意見提出について
- (6) 閉会

3 出席委員

杉原 薫委員，藤原 奈美委員，鶴田 啓洋委員，原之園 哲哉委員（中野 健作代理），
 田淵 千春委員

4 議事概要

- (1) 部会長選出
 部会委員から、杉原委員の推薦があり、委員からは異議なく杉原委員が部会長に選出された。
- (2) 子ども・保護者との意見交換
 - ① 委員から、子どもに対して、以下のような質問があり、意見交換を行った。
 - ・ どれくらいの頻度で「ふらっと」を利用しているか。
 → 水曜日の休みの日以外は毎日利用している。水曜日を利用して学校に登校している。
 - ・ 「ふらっと」では、何をして過ごしているか。何をしているときが楽しいか。
 → 勉強、友達と話し、ピアノを弾く等している。勉強は学校のワークや自分で探してきたプリントをしていてほぼ自習。色々な人と話をするときが一番楽しい。
 - ・ 「ふらっと」に来るようになったきっかけ、「行きたい」と思ったきっかけ
 → 家族に教えてもらって、1 回だけ相談に行った。その 1 ヶ月後に見学に行き入った。すごい雰囲気が良くて、みんな楽しそうにしている景色が印象に残っている。
 - ・ もっと良い場所にするために、こういうのがあればいいなとかあるか。
 → 今のままで十分楽しく過ごしている。
 - ・ 学校の先生、もしくは学校にして欲しいこと、又はして欲しくないこと
 → プリントを含めて、学校からの情報なんかを届けてもらった方がよい。
 - ・ プリント等を届けるときに、同じ学級の人とのメッセージとかあった方が良いか。
 → クラスの人たちと今はあまり関わりたくない。学校に来たときに、色々話しかけられることは、今は苦痛

- ・ 「学校に行った方が良い」とかいう気持ちはあるか、それとも、「今ここで頑張って、ここを出発点にしてやっていけたら良い」という気持ちか。
→ 高校とか大学とかになっていくから、学校に行った方がいいとは思っている。今の全てに満足しているわけではなく、学校へ行った方がいいことは分かっている。
- ・ 「ふらっと」がどんな場所だからおしゃべりとかできるのか。
→ 周りの人とか話しかけられるようになって話せるようになったから、話しやすい人とかがたくさん周りに居ると、自分から話せるようになる。
- ・ 「ふらっと」は自分らしく居られる場所か。
→ 最初の頃は、頭の中で「次にこれ言って、次にこれ言って」と組み立てながらやっと口に出すみたいな状態で、慣れてきたら気にしなくなった。自分らしく居られる場所である。
- ・ 「ふらっと」を人に勧めるとしたら、どこがポイントになるか。
→ 雰囲気がすごくいいこと。人と話すのが苦手でも、他の場所よりかは入っていきやすい。
- ・ 「ふらっと」には、趣味があう友だちはいるか。また、友だちは異年齢か、同年代か。
→ 趣味があう友だちはいる。1つ下や同じ学年、1つ上もいるので、年齢はあまり関係ない。
- ・ 「ふらっと」を利用するときは、大体、何人位いるのか。何人位が安心していられる人数か。
→ 少ないときは3、4人位で、多くて10~12人位いる。一概に何人がいいとは言えないけど、あまり多すぎるとちょっと「多いな」と思う。

② 委員から、保護者に対して、以下のような質問があり、意見交換を行った。

- ・ 「ふらっと」を利用して、子どもが「こんなふうに変ったな」という点を教えて欲しい。
→ 人とコミュニケーションをとることが上手になってきた。学校に行けなくなったときは、学校の友だちの話題についていけなかったり、話しかけても反応がなかったり自信をなくしたという感じだった。スタッフの方が優しく声をかけてくださって、少しずつ慣れてきて、会話も楽しめるようになった。他の利用者とも話ができるようになって自己肯定感が高くなった。
- ・ 施設の情報提供はだれからですか。
→ 父親とは単身赴任で一緒にはいないですけど、父親が色々調べてくれて、最初にコンタクトをとってくれた形である。
- ・ 初めて「ふらっと」に相談されたときの印象
→ 大倉先生がすごく時間をかけて丁寧にお話をしてくださった。一番心配していたのが、子どもの将来に関してのことだったが、「ふらっと」に通われている生徒さんのことを例えにして、高校、大学へ進学している子や就職して元気に頑張っている子が元気に頑張っているの、大丈夫ですと前向きなお話をされて安心した。ちょっと先に明かりが見えた感じがしたのを今でも覚えている。
- ・ 相談して、親子で見学に行くまでの期間のお母さんの気持ちについて
→ 何とか学校に行こうと頑張っていた時期なので、すごく不安な毎日だった。子どもが辛そうにして、家でも泣いたり、体調を崩したり、そういうものの繰り返しだった。
- ・ 「ふらっと」に決めた理由
→ 本人が前向きだったことと、父親が、温かみがあって利用者の子どもさんも楽しそうにリラックスして過ごされていて、「雰囲気がいいな」と感じたこと。

- ・ 学校に行くのがしんどい子どもにとって、どんな場所があると良いと思うか。
 - 子どもが安心していられる場所、個性が尊重されとか、関心とか興味とか能力とかを安心して伸ばせるような環境だったら望ましい。学校に行けていないと、子ども自身も引け目を感じたりとか、保護者も義務教育を受けさせられていないという負い目を感じたりしてしまうので、「学校に行けない＝不登校」ではなく、自分に合う別の学校に行けるという、学校にもっと選択肢があってもいいのではと思う。
- ・ 不安があるときに、お母さんにとってどんな支援があるとありがたいか。
 - 学習に関しては、今のところ、完全に自習 100%なので、学校で今どういうことをやっているのか分かって、使っている教材があれば同じように使わせてやりたいなと思う。例えば、本人は一生懸命に教科書の順番通りに勉強を頑張ったが、実際のテスト範囲が教科書の順番通りではないことがあり、本人もすごく困った。
- ・ どのように通っているのか。(手段、距離、時間)
 - 送迎していただける日はある。送迎がない日は、車で 15 分ほど送り迎えをしている。1 時間もかかると考えるが、それほどでなければ、車が運転できれば気にならない。車がないと、距離の問題は大きいと思う。
- ・ 「ふらっと」を見つける前に、子ども本人も含めて家族で色々な施設を調べたか。実際に رفتりもしたのか。
 - 小学 6 年の 3 学期から行けなくなり、最初は担任の先生に相談するとことから始まった。学校に相談員の先生がいらっしゃるということで、相談員の先生に相談した。その後、教育支援センターを紹介されて行った。中学校に入ってからすぐ、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーにつないでいただいたり、別室利用の申請をして別室を使えるようにした。別室は学校の中にあり、教室に入るよりはよいが、ハードルがある。
- ・ 「ふらっと」に通う前と、今現在と、それぞれどんな情報があったら良いと思うか。
 - 学校に行けなくなった当初、最初は何もない状態だったので、インターネットで検索するとかだった。相談先を自分で見つけて伺った際に、支援機関のリストを初めていただいて、全体の支援体制みたいなものを把握できた。自分で調べる前に分かっていたら、負担は少なかった。
 - 今は、進路を考えないといけない時期になってきたので、このような状態の子がどんなところに進んで行くのが良いのか色々情報が欲しい。
- ・ 学校から、総合教育センターや 24 時間ホットラインのような相談場所の電話番号や連絡先が掲載された一覧表を毎年、全ての子どもたちに配布しているが貰っているか。
 - 頂いたことはない。小学校 6 年生のとき、子どもが学校に行けなくなってしばらくしてから、学校にはこういう相談員がいるという紙が配られた。知っていたら対応できたのに。
- ・ 他の保護者に相談とかしたか。「ふらっと」では、親の会のような交流会があるのか。
 - 子どもが学校に行かなくなって付き合いもなくなると、お母さんと話す機会とかも無くなっていった。「ふらっと」にいらっしゃる保護者さんと話ができる機会がある。参考になることがいっぱいある。
- ・ 進路のことが不安になると思うが、学校説明会みたいなのがあった方が良いか。
 - あった方が良い。
- ・ フリースクール一覧など、フリースクールの情報があたらいいと思うか。
 - はい。学校からはそのフリースクールの話はなくて、自分で探すしかなかった。

- ・ 学力の部分で丁寧な、マンツーマンで教えてくれる人がいる場所がいいのか、それともほどこに学習サポートをしながら、遊びやどうでもいい話、体を動かすことなど色々な経験ができる場所がいいのか。
→ 希望としては、後者が良い。勉強は気になっているが、ある程度は自分でやれることが分かってきた。色々な経験とかができる場所の方は良いと思う。

(3) 施設代表者との意見交換

大倉一真氏より、施設の活動状況の説明が行われたあと、委員との意見交換を行った。委員からは、大倉一真氏に対して、以下のような質問があり、意見交換を行った。

- ・ フリースクール事業だけでスタッフは何人いるのか。
→ 全員、複数の事業の掛け持ちになつている。そうでないと、ここはまだ小さなところなので、色々な事業費のお金を寄せ集めて運営しているので、一人の給料を作るのに、色々な事業から組み合わせている。私を入れてスタッフは10人いる。
- ・ スタッフは専門的な資格を持っているのか。
→ 一面だけで物事を判断しにくいので、できるだけいろんな人がいろんな目線で関われるように、そこにちゃんと信憑性や裏付けを持てるように、資格者を基本的には雇用するようにしている。今は、教員免許、精神保健福祉士、臨床心理士、言語聴覚士、作業療法士、看護師、保健師、栄養士に入ってもらって対応している。
- ・ 運営していく上での課題、経営していく上での課題
→ スタッフの給料を高くしたいというはある。今3,000万ぐらい入ってくるお金で、そこから運営費とかを含めると、一人あたりの金額はまだまだ十分ではない。スタッフには長く続けていただきたい。本当に長い子で2年、3年と関わるので、その子が、高校へ行ったり就職とかになったときに、関わってくれたスタッフがいると安心感とかもある。安定、安心した雇用が課題である。
- ・ 利用料について
→ 利用者からお金をとるということをしていない。平等性というか、少なくとも義務教育の子供たちを預かっているということになると、教育の機会をちゃんと担保してあげないといけない。寄付は募っている。一般社団法人なので、マンスリーサポーターのような、一緒に運営していただくというような感じで、お声かけさせてもらっている。一ヶ月に2,000円で、マンスリーサポーターに入ってくださっているが、送迎したりお昼ご飯を食べさせたりとかを考えると、家にも2,000円以上はかかる。
遠慮なく来てもらうために、食費や体験活動費もとっていない。
- ・ 学校との連携で、具体的要望があれば教えて欲しい。
→ 昔に比べると、学校にも理解をしてくださっている。定期的に先生方が見に来られますし、情報共有は、クラウド上でタイムリーに連携させてもらっている。
子どもの支援をするにあたって、学校も私たちも色分けをしていない。親が学校に対して敵対しているので、子どもも親に習って同じように言わないと、親の機嫌を損なうみたいのがある。私たちは常に一緒に居るので、「学校の先生はすごく応援してくれているよ。」と子どもに伝えると、その先生が見学に来たときは、ニコニコと喋ったりする。それをきっかけに、「週1回頑張ってみようか。」となる。
昔と比べて、十分すぎるくらい先生方は時間をとってくださってありがたい。
- ・ スタッフは全員常勤なのかどうか。
→ 常勤は4人、パートは6人

- ・ スタッフ一人あたり子どもを何名みているのか。
→ 一人あたり3人、それ以上は一人で見るとなるとはならないようにしている。
- ・ スタッフと意思疎通するための工夫
→ グループLINEでタイムリーに共有している。水曜日の3時とか4時ぐらいから1時間ぐらいパートさんも含めて、ミーティングをするようにしている。また、月1回、研修とかも含めてやるようにしている。
- ・ 資金調達の状況及び経営方針について
→ ひきこもり支援や就労支援をしているときに、通信制高校のサポート校をされている事業所さんと知り合って、通信制高校8名を預かることになった。当時一人月4万円もらって、32万円の売り上げを預かっていたが、1年、2年と見ていくと払えない方が多かった。月2万円にしたり、減免制度みたいなものを作って、月1万円とか5千円とか3年目までしていたが、お金を取ることが辛くて、「もういいか。」というようになった。
今のところ、委託事業を行政から、随意契約にしているものが多い。複数の事業を実施しているの、どれか削られてもこの取組は担保できるかなとかいうのを見越している。

5 委員からの質問等

- (1) 部会委員から、後日以下のような質問があり、大倉一真氏より御回答を頂いた。

(質問1) ※藤原委員

複数拠点を運営されているが、こどもや保護者等から依頼があって錦江町や肝付町での立ち上げへと繋がったのか。あるいは行政からの依頼、団体からのアプローチ（団体が考えるフリースクール・居場所の必要性）があって立ち上げたものか。後者であれば、鹿屋市での運営と比較し、利用したいこどもや保護者等からのアプローチ（紹介・問い合わせ）に違いはあるか。

(回答)

～肝付町について～

令和5年度より肝付町にて、公設民営型の教育支援センター（不登校児童生徒支援室：町独自予算）の運営委託を受けている。そこに至ったきっかけとして、令和2年度より肝付町から委託を受けている「地域自殺対策強化事業」での取り組みの成果が大きいと考える。

不登校や苦登校の児童生徒の中には希死念慮を少なからず抱いていることもあり、ご家族からの相談も含めて、当機構につながるケースが徐々に増えていった。そして、フリースクールの利用を希望する児童生徒や訪問支援の必要なお家族が増加し、訪問や送迎するにも車1台では追いつかないほどの相談件数となったため、行政へ町内での居場所拠点づくりの打診をおこなった。ほぼ同時に、前教育長から「新たな教育支援センターの仕組みを模索している」と相談があり、県・町職員8名の前でプレゼンテーションさせていただく機会をいただいて、結果その翌年度から不登校児童生徒支援室の開設が決まった。

鹿屋市ふらっとの定員は15名ほどで、それなりに児童生徒の密度が高くなるため、通所できなくなる児童生徒もいた。また、他の生徒と車に同乗できない児童生徒もいた。もちろん、鹿屋市ふらっとの雰囲気がいいと言って、遠くても通所していただける児童生徒もいるが、通所できなくなった児童生徒のご家庭からは、「肝付町内で開設してほしい」「もっと広い場所なら」「もう少し静かであれば」などといったご意見もあり、実際に肝付町内で開設してから通所するようになった児童生徒もいる。

～錦江町について～

令和7年度より錦江町にて、児童育成支援拠点事業を受託し、居場所の運営を開始した。この居場所は、不登校児童生徒だけでなく、放課後の居場所などの機能も持ち合わせている。錦江町からは、令和3年度より地域自殺対策強化事業及び支援対象児童等見守り強化事業（厚労省）を受託し、地域自殺対策強化事業では不登校等の児童生徒の心のケア、支援対象児童等見守り強化事業では児童虐待などを防止するために家族支援や居場所を活用した支援を行った。

肝付町と同じように、訪問や送迎を考えると錦江町内に開設しなければ対応しきれないほどの相談件数となり、令和6年度に入って、役場内で「町内に支援付きコミュニティ施設をつくりたい」と

という話題が上がってるのを聞き、当機構の受託事業での課題とコミュニティ施設の構想を児童育成支援拠点事業で解決できないかと、令和6年9月に書面をもって提案させていただいた。

(質問2) ※藤原委員

大隅地区は移動の問題がとても大きいと考えるが、各拠点は保護者等の送迎のみで来所となっているのか。団体の送迎で利用できていることもがあるのか。(送迎に関する支援などを受けているのか)

本人は利用したい気持ちがあるが、「送迎」がネックとなって利用できていないこともいるのか。

(回答)

送迎について、何らかの事業を委託いただいている自治体の児童生徒についてはその事業の枠組みの中で送迎対応をしている。

肝付町の不登校児童生徒支援室(教育支援センター)は、公的に「学校の代わり」となる施設なので、毎日送迎対応をしている。(肝付町開所曜日の火水木以外は鹿屋市ふらっとにも送迎)

錦江町の居場所は週3日開所(月水金)するという仕様になっているので、その日に加えてもう1日、鹿屋市ふらっとの利用を希望する児童生徒は送迎対応をしている。鹿屋市含め、それ以外の市町については、大隅地区に限り、各方面で曜日を決め、週2日は送迎対応している。対応エリアの距離制限をして毎日送迎するよりも、平等性を取って、送迎対応の日数が2日になっても、大隅地区全域の児童生徒が利用できる方を選んだ。現在の運営経費内で整えることのできる人員・車両体制を考慮し、令和7年度はこの送迎対応となっている。

当機構で送迎対応ができない日は、ご家族の送迎協力で児童生徒は通所している。しかし、ご家族の事情によっては1日も送迎できないというご家庭もあり、当機構の送迎がなければ1日も利用できない。もちろん、市町が運営する教育支援センターにも通えない。現在、送迎にかかる燃料費及び車両リース費や維持費といった経費はすべて寄付金で賄っているが、それでも、送迎の仕組みは必要である。送迎だけでなく、外出できるまで忍耐強く訪問もし、復学のための同行登校も含めて不登校支援であり、居場所の設置だけではここまで膨らんだ不登校児童生徒の数を抑えることは不可能と考える。ひきこもり支援と同じく、アウトリーチのノウハウは、送迎等の仕組みと同じく重要と考える。

(質問3) ※藤原委員

場づくり、雰囲気づくりのためにやっている工夫にはどのようなものがあるか。

(回答)

週1回以上は正規職員でのミーティングを実施し、月1回以上はパートも含めた全体ミーティングを実施している。そこで、ケース検討や勉強会、反省会をおこない、職員のスキルアップに努めている。また、最近では日本財団の主催する研修や、教育委員会が主催する研修に参加し、居場所づくり、雰囲気づくりに生かしている。

そして、居場所の雰囲気づくりに重要なことは、その居場所を利用する児童生徒の思いを他の児童生徒含めて、みんなで共有することである。ほとんどの児童生徒は初対面だが、自分と似たような状況の児童生徒と気持ちなどを共有することで安心感が生まれ、職員からの少しのきっかけづくりで、配慮しあえる空気感がそこに生まれる。「自分がされて嫌なことは私にもしてこないだろう」といったような暗黙の空気感である。そういった空気感であれば、学習時間は誰のことも気にせず一人の世界で過ごすし、息抜きの時間は誰かを誘って公園に遊びに行ったり、誰かとふざけあったりしている。そういった様子の中で、全体ミーティングで共有する情報や支援方針をもとに、職員が適度に児童生徒と関わっている。勉強の話、趣味の話など、そのときの児童生徒の様子を観察しながらバランスを考えて話しかけたりしている。その対話の中で出てきた興味関心からイベントを考え、児童生徒の参加型でその内容をつめていくようにしている。そこから、当機構のスローガンである「誰もが自分らしく生きて、誰もが活躍できる」につながっており、イベントに参加する児童生徒は、それぞれ役割を担いながら、生き生きと楽しそうにし、だから、様々な学校行事に参加できるようになり、少しずつ教室に戻れるようになった生徒もいる。

イベントの中には寄付から支出しているものもあるが、協賛いただく企業等からは無償でその機会を提供いただくこともある。

今後、県として居場所への補助等を検討されるのであれば、一定の職員のスキルは利用者にとって保証されなければいけないと考える。そのためにも、県主催の従事者研修の開催をご検討いただきたい。

(質問4) ※藤原委員

経済的な問題を抱える世帯だけが利用しているものではないと思うが、食事提供の必要性をどのようにとらえて運営しているか。

(回答)

食事提供は、児童生徒のための「健全育成」でもあり、「体験・経験の場の提供」でもあり、保護者のための「負担軽減」でもあり、支援者側にとっては「アセスメントの機会」でもあります。

当機構には栄養士や衛生管理責任者を置いていますが、食材費含めて運営経費面で一般的には運用が困難と思われます。しかしながら、「食育」の一環として、仕事体験や農業体験と組み合わせたり、やはり、温かい手作りの食事を提供することで偏食が改善されたりもあります。「不登校で引きこもっていた期間、毎日一人で食事をしていた」という児童生徒は少なくありません。「みんなとリラックスしながら一緒に食事ができたので、学校に行っても給食時間に対しての不安がなくなった」と言ってくれたり、毎回、「おいしかった！ごちそうさまでした！」と感謝の気持ちを伝えることで、ポジティブな感覚を取り戻してのように、日々の児童生徒の表情を見ていると伝わってきます。

そして、やはり、「しっかり食事をとる」ということは「生きること」につながります。不登校になって、生きことをあきらめようとした児童生徒もいますが、昼食をしっかり食べるようになれば、夕食も食べれるようになり、規則正しく朝も起きれるようになるので、朝食もちゃんと食べてきます。同時に睡眠もしっかりとれるようになってます。不登校の状態のころは、やはり、食と睡眠が不規則になりがちです。この2つが整えば、復学に向けた支援の半分は終わったような感じです。当機構における支援の中で「食」は大切なキーワードです。

(2) 部会委員から、後日以下のような意見があった。

(杉原部会長)

① 利用生徒さんとの意見交換より

「ふらっと」の存在を知ったきっかけは親御さんからの情報提供だったようだが、実際に見学をしてみて、「楽しそう」「良い雰囲気」な場所だと本人が感じたことが通うきっかけとなったことで、(安心して)楽しく過ごせる場所かどうかというのが本人にとって大きな意味を持つことを改めて理解することができた。

また、学校に通うことはしんどいようだが、学習には前向きに取り組んでいるがゆえに、学校の授業で配布されるプリントや定期試験などの範囲などについては細やかに共有してほしいという要望があることが確認できた。

② 保護者さんとの意見交換より

「ふらっと」に通う前は話をすることが難しい状態だったお子さんが、次第に上手に話ができるようになっており、自己肯定感の高まりと成長を実感されている様子がうかがえた。他方で、学習面に対する不安は強く感じておられるようだった。現状では教科の学習は自習形式で行っているため、学力の定着、今後の進路という観点での不安がぬぐえないようである。

「学校にいけない＝不登校」というレッテルを貼られるのではなく、学校にいけないことを過度に気にしなくてもよい社会づくり、子どもたちの持つ個性や興味関心に応じて能力が伸ばせるように学校が多様化することの必要性について考えさせられた。

③ 施設代表者との意見交換より

送迎や昼食、LINEを使った細やかな連絡など手厚い対応をされているにもかかわらず、利用料の支払いという形ではなく賛助会員による寄付というかたちでの運営となっている。家庭の経済状況に左右されず学べる環境を確保するという施設代表者の理念に頭が下がる。なお、これは同機構がフリースクール事業以外の事業等で行政等から事業委託を受けていることによって可能になるものと思われる。

(中野様)

- ・「学校に行きたい」という気持ちを持ちながらも「行けない」苦しみをもつ親子の姿に、教育委員会や学校の果たすべき責任の重さを痛感し、すべての児童生徒が「学校に行きたい」と思える「魅力ある学校づくり」について、一層尽力する。
- ・ 学びの場を保障できるよう、教室に入れない児童生徒のための別室「校内支援ルーム」や、学校外の「教育支援センター」等における学習支援、各学校に派遣している相談員やSSW等、相談

体制の充実を図る。

- ・ 今後の進路について、また、学習をどのように進めるかについて等、少しでも不安が解消されるよう、学校と家庭、学校とフリースクール等関係機関が密に連携を図り、オンライン学習や学習プリント、テスト勉強等、学校はよりきめ細かな学習指導、進路指導を行う必要がある。
- ・ 学校に行かれないことに悩む児童生徒や保護者が、いち早く相談できる窓口、関係機関の周知を、より一層徹底する必要性を感じている。また、学校を含め、公私を超えた様々な関係機関との連携強化、相談窓口等の周知方法等について、さらに尽力していきたい。

(田淵委員)

- ・ 保護者が自分で探す負担さを感じた。たまたまこの方はとても相性の良い場所に出会えたが、もしあわない場合は体験や見学を繰り返さないといけないので情報がまとまっている物があると良いと思う。
- ・ 先輩の体験や実際にその先輩達と話を聞いたりするのは、本人にとって安心感や将来のことを考える良い機会になるようだった。同じ悩みを持つ仲間が集まれる場所が一番良いと感じた。
- ・ 基本的に無料と言うことで経営方法はとても他のところの参考となるのではないかと感じた。
- ・ 鹿屋市自体、学校・フリースクール・行政の連携がとれている印象。特に学校とフリースクールの関係は良く、お互いの情報共有もされており、子どもを中心に支援の輪がある印象。
- ・ 保護者同士の交流の場もあるようで、ここでの心の安心感は大きいと感じる。情報交換もしているようだった。自校の保護者とは関係性はないようだが、ここでのつながりをもてるのでとても必要な場と感じた。
- ・ 保護者への情報提供（不登校傾向児の様々な居場所について）は、何らかの方法で必要と感じる。また、周りの理解を広めることも必要と感じた。